

問題意識

アメリカン・フットボール（以降アメフトと表現）は、イギリス生まれのラグビーを元に、ルール変更を重ねてつくりあげられてきたスポーツである。「オフサイド」ルールの形骸化や「ダウン」制の導入、選手の機能分化と交代の自由化、ゲーム中における監督・コーチからの指示の自由などが重要な変更点であるが、それには「得点するため」「勝利するため」への徹底した「合理主義」が貫かれている。

今回は当時の社会的背景に絞った学習と感想である。紙面の都合で一部特徴的な内容に絞っての報告である。

1. 先住民と黒人の問題

i ホワイト・アングロサクソンの歴史観

アメリカ史では、よく「新大陸の発見」とか「新世界」という表現が出てくる。それは、まるでアメリカ大陸は、コロンブス以前は全くの未開地であったごとくである。

実は、最後の氷河期（三万五千年前から二万年前）に、氷で水位の下がったベーリング海峡をユーラシア大陸からアメリカ大陸に渡った人びとがいて、「コロンブス」当時には南北アメリカに二千万人ほどの人びとが住んでいて、高度の文明を持っていた。

「新世界」といった表現は、これら「先住民」の存在や（異）文化・宗教を否定し、野獣と同様に駆逐の対象としか捉えなかったヨーロッパ人（ホワイト・アングロサクソン）の歴史観である。アメリカ史上重要な意味をもつフロンティア・ラインはこの先住民との戦いの最前線であった。

ii 「奴隷解放」後の大土地所有制度と黒人問題

南部は大土地所有の上に黒人奴隷の労働力

を活用したプランテーションが主な生産関係であったが、南北戦争後の「奴隷解放令」は「自由」を得た黒人の新たな職業を求めた「放浪の旅」と労働力を失ったプランターのプランテーション放棄、綿の生産停滞を引き起こした。

一八六五年、シャーマン将軍は特別野戦命令を出し、サウスカロライナの海岸地方の没収地（軍管理下）を四〇エーカーごとに分割し黒人に分配した。これにより約四万人の解放黒人がその土地の占有権を認められ、耕作に従事した。これは、共和党改革派の南部戦後処理再建策と軌を一にするものであった。

しかし、大統領に就任したジョンソン（共和党保守派）は、没収地の返還命令を出し、戦時中の土地改革の試みを挫折させた。南部全域の解放黒人の「四〇エーカーの土地と一頭のラバ」の分配という熱き期待は実現されなかった。

政権を握った共和党保守派は、大土地制度の温存と前奴隷の黒人たちを同じプランテーションにおいて低賃金労働者として活用することを選択したのである。これが「奴隷解放令」後のアメリカ民主主義の実態である。

2. フロンティアのアメリカ史的意義

北アメリカ大陸の（「白人」的）開発は東部から始まり、フロアンティア・ライン（開発地と「未開」地の境）は西漸し、約三百年を費やして西海岸に到達する。

このフロンティア・ラインの西漸運動の意義は、①アメリカ人気質を培養したこと、②世界的不況下においても経済的発展を可能にしたこと、③工業化と領土の拡大（農村の拡大）が平行して進んだために、労働力を外国よりの移民に頼らざるを得なくしたこと。④労働力不足は東部地域の労賃を引き上げ、機械化（技術革新）を促したことなど、アメリカ史的意義は大きい。

i アメリカ人氣質の誕生とWASPの支配

領土植民地の南部に対して、自治植民地の北部ニューイングランド地方は、一七世紀入植当時から「小農民的土地所有」が特徴であったが、気候や地勢的にも飢えとの厳しいたたかいを強いられ、ピューリタンの「禁欲的労働観」が受け入れられる素地があった。

そして、西部の広大な土地（フロンティア・ラインの向こう）の存在が機会の平等をもたらし、個人主義、民主主義を促進させ、また、開拓の経験が進取の気性、実際性と行動力に富む国民性を形成させた（フレデリック・J・ターナー）。

つまり、ピューリタニズムと「フロンティア効果」が結合され、ヨーロッパ人とは異なる、目的達成のための「合理主義」や「個人主義」的で「自由主義」的なアメリカ人氣質が培養されたのである。

そして、南北戦争以降のアメリカ社会の発展は、ニューイングランド地方=WASP（ホワイト・アングロ・サクソン・プロテスタント）のヘゲモニーのもとにすすめられたのである。

ii 世界的不況下の経済発展

アメリカの工業化は、イギリスの産業革命（イギリスの工業化のみ産業革命と呼ぶ。一七七〇年頃始まる）より遅れて一八四〇年頃に鉄道建設と平行して始まる。これを工業化の第一段階とすれば、工業化の第二段階は南北戦争直後より始まり、工業生産は生産財部門を中心に連続的な技術革新の進展によって飛躍的に拡大し、一八九〇年代にはアメリカ資本主義がイギリスを凌駕する。

一八七三年からはじまる世界的不況下において、アメリカ市場でも飽和状態に陥り、限られた市場をめぐる企業間競争の激化は、過剰生産の調整のための企業合同、統合（「弱肉強食」）へと進められ、産業独占や金融独占の誕生へと発展する。

アメリカ経済が、大不況下においても発展し続けた要因については、概ねつぎのような

ことが考えられる。

①南北戦争で保護貿易志向の北部が勝利し、イギリス商品に関税をかけたことでイギリスからの輸入が激減したこと。（国内産業の保護）

②WASPのヘゲモニーが確立されており、彼らの「合理主義」が技術革新をすすめたこと。

③一八七〇年から鉄道建設によって西部地域の開発が大きく進展し、アパラチア山脈とロッキー山脈の間に世界最大の農業地帯が生まれて、機械化による大規模農法が採用され農業生産が急増したこと。

④鉄道建設はまた鉄鋼にたいする需要だけでなく、石炭、銅、木材、その他の需要を喚起するとともに、アメリカ全土を対象とする国内市場の統合と拡大に大きく貢献したこと。

iii 旧移民と新移民

一七九〇年におけるアメリカの人口構成は、イギリス系五六%、アイルランド系八%、ドイツ系七%、オランダ系三%で、一九%が黒人であった。植民地当時はイギリスの支配下にあり、その後もイギリス文化と制度を継承しそれを社会の根幹としつつ、アメリカ人氣質とピューリタニズムを合わせ持つWASPがアメリカでの支配的地位を占めたのである。そして、長らくアメリカでは、「移民とその子孫が故国の伝統をすてて、主流をなすWASP的文化に同化すべし」とするアングロ・コンフォーミティの考え方が強く、同化を拒む人々（アイルランド人はカトリック教徒）は敵意と差別に直面した。

二〇世紀に入ると移民の主要供給源は、西・北欧（旧移民）から南・東欧諸国（新移民）へうつり、一八八一～一九二〇年の四〇年間にイタリア人四一二万人、オーストリア・ハンガリー三九九万人、ロシア三二四万人にもなっている。

新移民の多くは農民でありながら、余りにも貧しく西部の土地を購入できず（フロンティア終息宣言以降は土地もなかったが）、工場における非熟練工として低賃金労働を強いられた。

3. 社会進化論（適者生存）

木戸美幸氏は、作家イーディス・ウォートンが一九一三年に出版した文学作品『お国の習慣』の評論の冒頭で、「社会進化論」が当時のアメリカにおいてどのような意味もち、如何に活用されたかについて詳しく述べている。

一八五九年にイギリスの博物学者チャールズ・ダーウィンが、「自然淘汰または生存競争における優性種の生き残りによる、種の起源論」＝「進化論」を発表した。彼が「種の起源論」で用いた「自然淘汰」は、資源も場所も限定されている自然界において、生存のために引き起こされる闘争を意味するための用語であった。

この考えをさらに推し進め、一八六四年に「適者生存」（＝社会進化論）という造語を生み出して、人間社会での競争を説明したのは、イギリスの哲学者ハーバート・スペンサーであった。

『彼は、人間社会には自然の法則が組み込まれているとして、動植物の進歩の法則を、人間社会の政治、経済、産業技術の発展にあてはめた。人間社会のあらゆる闘争は、「発展」に至るための原動力として正当化』（木戸美幸）されると論じたのである。

「アメリカの歴史家リチャード・ホフスタッターは、一九世紀最後の三十年間および二〇世紀初頭にかけてのアメリカ社会では、進化論の影響力が圧倒的」（同）と述べているが、スペンサーの社会進化論を信奉し、強者必勝を地で行った実業家には、鉄鋼王アンドリュー・カーネギ、金融王 J・P・モーガン、鉄道王ジェームズ・ヒル、石油王ジョン・ロックフェラーといった、アメリカ産業発展の立役者たちがいる。「彼らは、最強で効率のよい組織が市場を独占するのは、自然の法則にかなっており、市場独占はアメリカ経済の発展に寄与できる」（同）と自負し、政治上の放任主義（＝弱者の救済は、生存に適していない人間や組織を増やすことになり、社会的経済的発展を阻害し、ひいては国の不利益をもたらす。）を主張した。

独立戦争以前にアメリカに渡ったアングロサクソンにとっては、限りなく広大な「自由な土地」（＝フロンティア・ラインの向こう）の存在が、「貧しさは自己責任」と見なすこともできたであろう。しかし、居住地を奪われた「先住民」や「奴隷解放」後も過酷な労働条件を強いられた黒人、低賃金労働でアメリカ資本主義の発展を底辺で支えてきた新移民にとっては、決して豊かさを享受できたわけではなかった。

にもかかわらず、アメリカにおける社会保障制度の始まりは、概ね世界大恐慌の克服のためにとられたニューディール政策の時期（一九三〇年代）と遅く、医療保険制度（共済制度）においては未だになく、底辺層には厳しい生活環境を強い続け、生命保険会社の暴利を演出している。

アメリカ的民主主義はあくまでもホワイト・アングロ・サクソン・プロテスタント内における民主主義なのである。

4. アメフトの底に流れる思想

i アメフトは名門私立大学で生まれた
一八七〇年以降のアメリカの経済発展とそれを担った人々の思想についてみてきた。

アメフトは、エール大学やハーバード大学をはじめとする、現在では IVY（アイビー）リーグに所属する大学の学生によって開発された。では、IVY（アイビー）リーグとはどのような大学の集まりなのか？

IVY（アイビー）リーグとは、アメリカ合衆国東部の世界屈指の名門私立大学八校の連盟であり、コーネル大学を除く七校は、独立戦争前に創立され、北部・中部の植民地における高等教育を担っていた。七校の現在は無宗教の大学となっているが、創立同時はプロテスタント系の「会衆派教会」や「長老派教会」、「聖公会」系の教会が創立したものであった。

ジャーナリストの山田順氏は、「かつて、ハーバードなどのアイビー各校は、WASPの子弟の高等教育機関だった。だから、それ以

外の階層の若者は入れなかった。』『……「ニューヨーク・タイムズ」紙の日曜版にある「結婚欄」……には、毎週、数百組の応募カップルの中から二〇～三〇組ほどが選ばれて、経歴・写真入りで記載される。』「この欄は、ひと昔前は、WASPの息子・娘のウェディングしか載ってなかった。彼らは決まって資産家の息子・娘たちであり、花婿はアイビーを花嫁はセブンスターズを出ていた。」と、述べている。

ii アメフトの底に流れる思想

アメフトの誕生へのルール変更の歴史が、「南北戦争後のアメリカ経済の急速な発展から独占資本の誕生、一八九〇年代のフロンティア・ラインの終息とアメリカの世界進出」といった一連の時期と重なるだけでなく、どちらも「WASP」のヘゲモニーのもとに進められたものである。

戦術上においても「目的への合理性」においても、資本主義社会の「最高峰」といってもよいアメフトには、特権階級「WASP」の思想が息づいているのである。

5. まとめにかえて

一つのボールをめぐる敵味方が攻防を繰り返すこと自体を楽しんだ「マスフットボール」の時代の余韻を残したラグビーよりも、「WASP」は、「得点を挙げること」「勝利すること」を最優先に「合理主義」に徹しきることに楽しさを見いだした。

アメフトは戦術上において最高峰のスポーツと言われ、観客も数え切れない数のフォーメーションを使いこなす洗練された選手に歓喜の拍手をおくる。またダウン制は選手の作戦の確認だけでなく、観客に「次のプレーへの期待や予測をさせ、戦術を楽しむ」時間をも与え、スタジアム全員の心を一つにする。その意味でも「最高峰」と言えるのかも知れない。

しかし、このスポーツの楽しさを享受する過程で、このスポーツの底に流れる思想の感化を受けることにもなる。アメフトには「勝

利への合理主義」と「社会進化論」（＝適者生存）が息づいているのである。

近代スポーツでは「勝利のため」という大義がつけば、監督に絶対服従であるが、アメフトではダウンごとに監督の管理下におかれ、細部にわたって指示される。選手交代も制限なく監督の思いのままである。

戦術学習としての「有用性」は認めるが、一方で、児童・生徒の全面発達を願う我々教師の「願い」とアメフトの「合理主義」に基づく「機能分化」は明らかに矛盾する。

そして、このゲームの楽しさを享受する過程で「適者生存」の人間観に感化された若者が、実社会において、企業の業績を理由に本人なり同僚なりが職を奪われたとき、「労働権」「生存権」を主張することが出来るのだろうか、危惧するのである。

（東羽衣小 ふなとみこうじ）

【参考文献】

- ◆「地域からの世界史15北アメリカ」（猿谷要）朝日新聞社、
- ◆「概説アメリカ経済史」（岡田泰男・永田啓恭編著）有斐閣選書、
- ◆「一八七〇～一九一三年における工業化第二段階への発展過程」（大和正典）帝国国際文化一七号、
- ◆論文「アメリカンフットボールの起源とその発展段階」（米田満元）（一九五九年）、
- ◆「アメリカスポーツの文化史」（小田切毅一）不昧堂出版、
- ◆「フラッグフットボールの発展段階に関する一考察 アメリカンフットボールの発展段階をふまえて」（宗野文俊）北海道大学大学院教育学研究院紀要一一五号二〇一二年六月
- ◆「アメリカ進化論で読む『お国の習慣』」（木戸美幸）京都光華女子大学学習リポジトリ、
- ◆論説「アメリカにおける旧労働史学の歴史」（野村達朗）アメリカ経済史研究2号（二〇〇三年九月）、
- ◆久保文明研究会2003年卒論集「社会保障とアメリカ」（杉森 蘭）、
- ◆「日本人はなじめない、アメリカの超学歴社会」（山田 順）東洋経済オンライン